

Thomas Ernst:
The Syntax of Adjuncts

Cambridge: Cambridge University Press, 2002. xii + 555pp.

阿部幸一

1 はじめに

本書は、副詞を中心とした付加詞を、統語的及び意味的両方の視点から、総合的に扱った意欲的な大著である。全体は九つの章からなっており、従来どちらかという付加詞については、統語的な分析が中心であったが、本書ではかなり意味論に重心が移った分析が試みられている。以下、各章の内容を概括して考察を加える。

2 構成

第一章は導入部として、従来付加詞をめぐるものとして提案されてきた、統語的分析のほとんどの原理や原則は、実は意味的に、より制限的にかつ一般的に説明されるものであり、その点からすると Ernst の枠組みでは、狭義の統語論でのみ扱われる付加詞の分析は、かなり限定的なものになると告げられる。

第二章では、付加詞の主たる意味的原理である、「FEO 演算 (FEO (=Fact/Event Objects) Calculus)」が提案され、第三章では、作用域に基づく様々な意味的な規則が提案される。

第四、五章では、従来の分析への批判がなされ、第六、七、八章では、第二章及び第三章で提案された原理や原則を、個別の資料に当たって、さらに考察している。第九章は、これからの展望を含めた結論となっている。

3 主な主張

Ernst の提案する FEO 演算とは、次のようなものである。

(1) predicational adverbs (叙述の副詞：話者指向の副詞，主語指向の副詞，様態の副詞などを含む，大多数の副詞類) が取る項は，次の FEO の階層性に基づかなくては行けない。

(2) Speech-Act > Fact > Proposition > Event > Specified Event

(一方，非叙述的な participant PP は，FEO を要求しないので，かなり自由に生起することが予測される。また統語範疇と特定の意味タイプの間には，一対一の対応関係があるわけではないとも主張される。)

具体例を挙げてみよう。

(3) a. Carol perhaps will cleverly agree to go.

b. ?*Carol cleverly will perhaps agree to go.

(3 a) は，Proposition を要求する話者指向の副詞である perhaps が，Event を要求する主語指向の副詞の cleverly より上位にあるので，文法的に正しいことが予測される。一方，(3 b) は，FEO の階層性を破るので，文法的でないとは判断される。

これに加えて，個々の副詞類に相当する意味的な鑄型が，その意味構造を構築する。ここでは，詳細まで立ち入ることはできないが，例えば様態の副詞を扱う Manner Rule では，意味的には Event どうしを比較するものとして，様態の副詞が FEO として Specified Event (VP に相当) を取るだけでなく，Event (PredP に相当) を取ることが予測され，(4 a, b) のような，副詞の付加される範囲までが予測される。

(4) a. She has been [_{VP} talking about her sister loudly]

b. She has been [_{PredP} loudly talking about her sister]

次に大きな原理は，語順に関わる「方向性原理 (Directionality Principle)」と「重量理論 (Weight Theory)」である。理論的な詳細は省くが，方向性原理は，Kayne (1994) の「非対称性の原理 (Antisymmetry)」に対立するものであり，付加詞の生起する右方位置を説明するために，仮定されたものである。すなわち，(i)

指定辞—主要部の配列型において、機能範疇が照合する場合は、その方向性に従う。したがって、指定辞は普遍的に主要部の左に来る。(ii)言語には、主要部が先頭に来るものと、後ろに来るものがある。そして、主要部が後ろに来る言語では、指定辞も補部も付加詞もすべて主要部の左に来ることが予測される。一方、主要部が先頭に来る言語では、指定辞は左に来ると予測されるが、補部の場合には、実際には動詞が移動するので、主要部の右に来ることになる。付加詞の場合には、VP 内では右に来るが、VP より上の時には、右にも左にも来ると予測される。

この方向性原理を補足するものが重量理論であり、[+Lite] をもった付加詞が、英語などの主要部が先頭に来る言語では、左に来ることを予測する。つまり、より軽い付加詞が後置されることが好まれないことを、音韻的に説明する。逆に、重い付加詞は [+Lite] をもたないため、前置されないことになる。

4 論点他

付加詞に関するかなりの意欲的な研究であることには間違いないが、従来の統語理論に慣れ親しんだものには、意味的な分析の部分には違和感を覚えるかも知れない。しかし、付加詞をめぐる研究といえば、従来 Alexiadou (1997), Cinque (1999), Laenzlinger (1998) など、ともすれば統語的な分析ばかりがなされていたものに対して、意味の方から一石を投じた点で、興味深いと思われる。

一番の真骨頂は、従来認可という観点から、付加詞を指定辞位置で認可しようとする分析では、副詞の階層性を説明しようとするあまり、Cinqueに見られるように必要以上の機能範疇を仮定するという問題点があった。この点については、Chomsky 自身も極小主義の立場から、必要以上の機能範疇の存在には警鐘をならしていた。そういった意味では、付加詞に関しては統語的な原理はそれほど必要なく、意味的 (FEO 演算や個々の意味規則) や音韻的 (方向性原理, 重量理論) な原理で、付加詞の分布を説明できるとする Ernst の分析は、必要以上の機能範疇を仮定しない点で、方向としては望ましいと思われる。

ただし、Ernst の分析でも、FocP, TopP, ModP, AspP 等の意味的な機能範疇

が、依然として統語論で仮定されており、問題が残る。また Ernst では、個々の意味規則がどういう風に適用するのか定かではないが、もし最近の Chomsky のフェーズ理論のように、もはや LF は存在しないという立場に立ち、それに対応させようとするならば、Ernst の意味規則は個々の規則が統語構造に適用して、直接意味構造が構築できるような形に変更する必要があるだろう。その際、FEO は、いわばインターフェイス・レベルでの「出力条件 (output condition)」に相当すると思われるが、FEO が適用しない非叙述的付加詞については、なんら制限を課さないとすると、かなり一般性が低いものになってしまう恐れがある。

また、副詞が動詞と直接目的語の間に現れないとする (例(5)) のような、いわゆる格隣接効果について、Ernst は動詞が PredP に上昇し、直接目的語は [Spec, VP]にあるものの、副詞は英語の場合、方向性原理によって、VP に左方付加されないと説明する。

(5) *John has kissed amicably Mary.

一方、仏語 (例(6)) のように、主語と動詞の間には副詞が現れないことについて、Ernst は仏語のような言語では、T' への付加は不可能として、(5)の場合とは別の説明を与えている。

(6) *Jean-Pierre certainement a parlé à Marie.

Jean-Pierre certainly has spoken to Marie

しかし、(5)と(6)の現象は巧みに絡まっており、(6)の副詞の生じている位置は、本来接語の生じる位置であるので、接語という観点から、副詞の生じる位置を考えると、両者の関係を統一的に扱えるのではないかと思われる。

5 結 語

題名から「付加詞の統語論」と思って、最近の極小主義に見られる付加詞の統語的な分析を期待する人には、かなりの部分が意味的な分析となっているので、期待はずれになるかもしれない。しかし、ここでは狭義の統語論ではなく広義の統語論 (意味論も統語論も含む言語分析) と考えれば、Ernst の分析はそのページ数が物語るように、付加詞 (といっても、大部分は副詞) について、

かなり網羅的に研究されているので、付加詞に関する研究としては、重要なものになるであろう。

参考文献

- Alexiadou, Artemis (1997) *Adverb Placement: A Case Study in Antisymmetric Syntax*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," In Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, Mass.: MIT Press.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*, New York: Oxford University Press.
- Laenzlinger, Christopher (1998) *Comparative Studies in Word Order Variation*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, Mass.: MIT Press.